

子ども・都市環境論序

Introductory Remarks to study on the Child and Urban Environment

岩田 好宏

IWATA Yoshihiro

262-0045 千葉市花見川区作新台1-18-5

要約

子どもの精神的身体的発達のためには、その人間的自然に見合う「なまの自然」を、息をするかのごとく日常にかかわることができるように、子どもが生活する地域に確保する必要がある。それは都市においてでもある。人間的自然とは自然のままではなく、自然的であるとともに社会的であるから、子どもが自由にそれに働きかけ改変し、利用できる自然が必要である。それは、都市のなかに意図的につくられ用意され、利用するだけのものとはちがう、特定の用途をもたないしかも極力整備されない自然を都市のなかに備える必要がある。整備された都市環境のなかに広い「目こぼし」地帯を用意する必要がある。

1. はじめに

都市環境は、便利で安全で美的で、環境汚染がなくなれば、子どもにとって好適な環境なのであろうか。いや、そうではない。それだけでは子どもの発達成長にとって適した環境とはいえない。なぜかと問えば、自然がないからという答えが返ってくるだろう。それでは、どのような自然が子どもにとって必要なのだろうか。

宮原誠一（1968）は、“おとなの都合がどのようであれ、子どもの身に立てば、地域のなかに自然がないことは重大である”と述べ、また“子どもの生活に自然が必要なのは子どもの人間的自然が自然に近いからである。身体と精神の自然な発達のために自然が必要なのである”と付け加え、続いて“子どもの生活のなかに自然がなければならず、地域のなかに自然がなければならぬのである。生活のなかに自然がある。その呼吸は、特別の機会に自然に接すること、たとえばピクニックやハイキングや登山などによっては得られない”と、子ども

と地域の自然とのかかわり方を説いている。

この引用文の第1は、現代における＜子ども・環境＞に重大な問題があることを明示し、つづく第2の引用文はその根拠を述べている。そして第3に＜子ども・環境＞のあるべき姿を語っている。これを是とするならば、現代における都市環境は、子ども、その発達成長にとって重要な問題をかかえていると考えられる。

この小文は、このような問題意識のもとに、子どもにとって都市環境はどうあるべきかを考えるための緒論である。そのため、子どもの人間的自然とはどのようなものか、都市環境に子どもの環境として基本的に何が欠けているか、どのような都市環境をつくり上げればよいかを考えるための、基礎的な検討の結果を述べることにする。

2. 宮原の「子どもの人間的自然」など3概念について

前掲の宮原の提言のなかには、それを理解するために必要ないくつかの鍵となる概

念がある。一つは「子どもの人間的自然」である。第2は「身体と精神の自然な発達」であり、第3に「子どもの生活に必要な自然」とはいかなるものであるかということになる。

「子どもの人間的自然」といった場合の「人間的自然」とはいかなるものか。これを解く鍵を小原秀雄(2007)がまったく別の問題意識から提示した、ほぼ同じ意味の概念「人間の^{ナチュラル}自然さ」が示してくれている。それは人間の起原との関係で追及した結果創出した概念であり、自然さは人間の場合、単なる自然ではなく、それと社会性が結合したものである。

人間は労働と社会の生活様式を身につけて人間になった。直立二足歩行は、その動物の基礎の大事な一つである(人間は直立歩行するようになって人間になったのではない。直立二足歩行だけでは直立二足歩行性ヒトニザルにすぎない。岩田、2008)。人間の祖先は森林からサバンナに移住し、採集植物食の生活から、それに狩猟動物食生活を結合させて、サバンナの生きもの世界のなかでその生態的地位を得て、一つの種として人間になった。それを具体的に支えたのは、動物の基盤と道具の製作・使用と共同狩猟・分配の社会性である。

これが人間的自然であると考えれば、それに見合う子どもの人間的自然に近い「自然」とは、少なくともつぎの三つのことを必須の条件として考えねばならない。

その一つは、そうした自然は人間によって改変され、利用される質をもっているということである。子どもの自然との関係は、利用だけの、また改変だけのものではなく、子どもがそれに働きかけて改変させ、しかも利用できる自然が、都市環境として必要であることを示唆している。

第2は、そうした人間的自然が、生きもの世界がこの地球上に誕生して以降人間までの長い歴史的過程のなかで形成されたものであるから、子どもの発達成長にとって必要な自然は、そうした人間までの生物進化過程との関係のなかで検討されねばならないということである。かつての大気汚染の代表的な物質であった硫黄化合物を例に述べれば、これが人間から植物まで有害であることは、35億年までさかのぼることによって、その理由が明らかになる。硫化水素にかわって水を、光合成における水素供給体とする藍藻類とこれを生産者とする生きもの世界(水生物界)が、硫化水素生物界から分化した後、硫化水素のなかで長期にわたって生活することがなかったからである。

第3に、共同狩猟・分配の社会性に注目しなければならない。出現したばかりの人間は、ヒトニザル類、ゾウ、シャチ、リカオンなどとともに、個性が高度に進化した個体から成り立っていながら、高度の集団生活を営む生きものであったと考えられるからである。

すべての生物がそうであるように、同種の個体は、生活様式も生活要求も基本的に同じであるから、本質的に競合関係にある。それにもかかわらず、集団生活するには二つの場合がある。一つは密な集団を形成しながらも、生活空間や食糧といった生活要求対象が満ちたりている場合である。第2は、競合関係にありながらそれをこえて集団生活を必要としている場合である。誕生したばかりの人間は後者であった。

「身体と精神の自然な発達」とは、こうした「人間的自然」あるいは「人間の^{ナチュラル}自然さ」に根ざしたものである。

3. 都市環境の問題点

都市環境についての検討は、ここで枚挙できないほど多数の研究と調査がされてきていると思われるが、最近のものとしては、ワールドウォッチ研究所による『地球白書2007-2008』の特集した都市問題がある。その序文で C.フレイヴィン(2007)は、都市の世界全体、地球に対する影響について、極度の貧困が集中するところ、疎外感や宗教上の過激主義など地域・世界の不安を引き起す温床になっているところ、世界の資源の崩壊と汚染の大部分を直接、間接にもたらしているところなど問題点をあげているが、これに加えて子どもとその発達成長

に視点をあてての都市環境論が必要である。

a. 生態系としての都市の問題点

都市のもっとも基本的な問題として、まず都市に生活する人間をふくむ生きものと環境からなる系(生態系)としての問題がある。有機物の流れをみると、都市だけでは人間をふくむ生物は生存できない。生態系として根本的な欠陥がみられ、むしろ生態系とは言いがたいものである(図1)。

したがって、都市のあり方は農村との連関において考えられねばならない。都市は農村と結合することによってはじめて独立体となる。

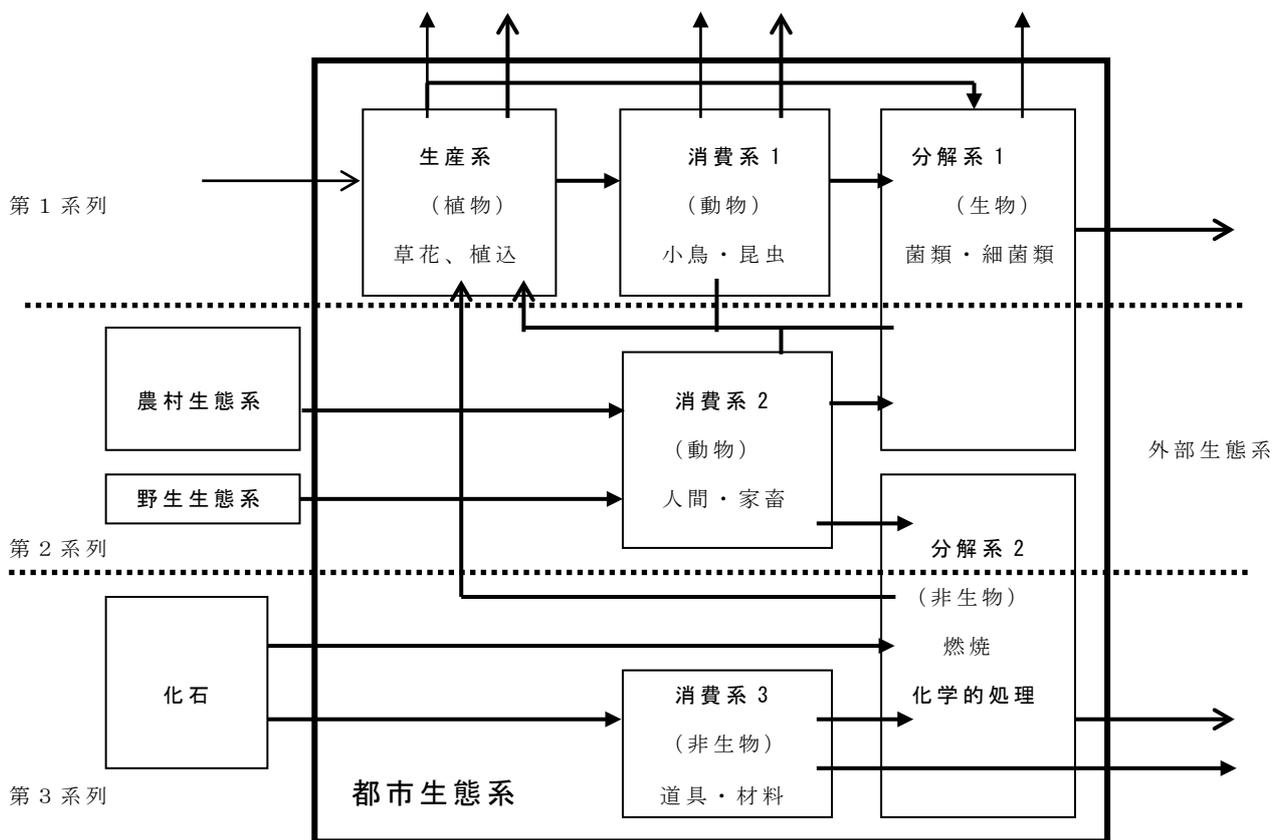


図1 都市生態系における有機物を中心とした物質の流れ → 有機物 → 無機物 (岩田、2008より)

b. 都市が道具の集積であることの意味

子どもにとって都市環境はどうあるべきか。

この問いに答える糸口として、再び小原の言を参考にしたい。それは、「都市は道具の集積」

(小原、前掲)である(なお、後述するル・コルビュジエ(1967)は、1923年に「住居は住むための機械である」と言っている)。ここでいう都市が「都市」なのか、それとも「都市環境」であるのかは、都市民のとらえかたに強くかかわる。都市は、都市民と都市環境の結合したものであるからである(ただし個人においては、他の都市民も環境の一部となる)。「都市」であるならば、人間は他の人間にとって道具であることを、この言は表わしている。さらに都市においては、他人は道具以上のものではないのかどうかについても考えねばならない。企業は、昨今言われるように株主のためにあるならば、そこに働く人は企業の道具であり、その家族は企業人の道具であるという面がみられる。こうしたことが現在の都市民に現実に認められるならば、それは子どもについてもいえる。そして、子どもはまちがいなくその前段の原材料の位置にある。人材確保とはまさにそういう概念である。

都市環境の問題に戻ることにして、それはまさに「道具の集積」である。このことによって、都市環境に必然的にいくつかの問題点が浮き彫りにできる。

一つは、道具は人間によってつくられたものであるから、人間がこれまでの歴史のなかで出遭ったものではないということである。色彩、形状、形成している物質種などすべての点について新しいものであるから、悪影響を及ぼす場合があり、また人間の身体的精神的变化の原因となる。とくに合成された新物質、外来生物、遺伝子操作により生まれた新生物は重大な問題を引き起す可能性が高い。また世界観の発展、技術開発は道具との関係が深く大きい。道具の使用についての習熟などでみられるように、そうした変化が人間的発達につながるものもある。

古い調査資料であるが、安部喜也・半谷敬久(1974)によれば、1970年における東京都

区部の建造物を作っている材料をみると、砂利・石材が80%以上で際立って多く、つづいてセメントの6.8%、鉄材・鉄製品の5.2%、以下順に木製品(4.3%)、建設用土石製品(2.5%)、アスファルト(0.7%)、ガラス製品(0.3%)、わら・い製品(0.1%)、銅製品(0.02%)、鉛製品(0.01%)、アルミ製品(0.002%)となっている(中野尊正ほか、1974)。都市環境は、人間的な自然からみれば初めて出遭う人工物からできていることが明らかである。

c. 都市における環境疎外

道具であることから派生する第2の問題点は、道具は特定の目的達成のためにつくられたものであり、他の目的のための利用に不適であったり妨害したりする場合がある。

加えて都市における道具類にみられる、その作り手と使い手の分離の問題がある。使い手は、そのためにその利便性、安全性、美観を手がかりに求め、使用する。その自然としての(物質としての、生きものとしての)性質については無視ないし軽視することになる。しかし、道具は人間にとって有用なものとして存在するが、まぎれもなく生きものであり物質である。人間と道具との関係は、人間と物質、生きものとの関係がその基盤にある。それは人間と自然との関係を希薄にするおそれがある。

d. 集合住宅「ハーレン・ジードルンク」をめぐる

スイス生まれのフランス人建築家ル・コルビュジエ(1887-1965)が、第2次世界大戦直後の1945年に、マルセイユに建てた高層集合住宅「ユニテ・ダビタシオン」は、狭い土地面積に多数の人たちのための住宅をつくり、広い面積の余剰地を確保し、そこに緑地帯を造成し、この二つを組みにした住環境を用意する構想に基づいたものであった。それは、かれの都市計画の基本となる「住む、働く、心身の育成、交通」のうちの「住む」と「心

身の育成」をめざしての具体化であった。

それは多くの建築家の注目を受け、こうした住環境確保の考え方によってつくられたもの、高層集合住宅だけに限ったものなどさまざまなものがラッシュのごとく、世界の都市に群となって出現した。それは今でも変わることなく続いている。だが、建築家集団「アトリエ5」が1959年から1961年にかけてスイス・ベルンに建設した集合住宅「ハーレン・ジードルンク」は、それらとはまったく異なるものであった。

村田実によれば、それは「ユニテ・ダビタシオン」の構想に強く影響されながらも、その“模倣に終ることなく、いわばユニテを再構成して、独自の住宅”を造った（村田実・平地勲 2003）。また村田実はつぎのようにも述べている。“ユニテをもう一度横倒しにして大地に寝かせ、南斜面に接地する長い長い住戸を平衡して並べた”（村田・平地、前掲）。

アトリエ5による「ハーレン・ジードルンク」は、集合住宅と緑地帯を組みとしたル・コルビュジエの住環境観を受け継ぎながらも、高層住宅のもつ基本的な問題点であった住宅と周囲との断絶を解消することができた。前掲の村田の“ユニテをもう一度横倒しにして大地に寝かせ”とは、「ユニテ」を、それ以前の広い面積にできた多数の低層集合住宅に代わって、緑地帯用の広い土地を確保するために建てたが、それにかわって再び元の低層集合住宅に変えたことをいう。ル・コルビュジエの「ユニテ」同様、ガレージ、ガソリンスタンド、店舗とレストラン、集会所、プール・スポーツ施設、ランドリーを付設し、さらに建物全体が緑で覆われ、隣接して森林が用意された。それは“理想的な住宅”と、見学に訪れた世界の建築家に言わしめるものである（村田・平地、前掲）。

しかしそれにもかかわらず、これも小原のいう「道具の集積」である。それを利用する者にとっては、道具を使うのと同じように利

用するだけで、それらにはたらきかけて改変することはない。

4. 一つのまとめ

a. 子どもの人間的自然と農村環境

農村環境は、屋敷などの住居、建物を除けば、すべて道具でもなく原材料でもない。自然物そのものである。それらは、ある目的に即して採取してはじめて原材料となり、目的意識をもってはたらきかけ改変することによって道具になる。田畑は、耕し、播種、施肥、散水など人為がない限り田畑ではなく、単なる半草原であり湿原である。これらのはたらきかけによって田畑となり、作物の生育に適した環境という道具に転換する。したがって、農村環境は、宮原のいう人間的自然に対応した環境としての質をもった自然である。

宮原は「なまの自然」という言い方をしている（宮原、前掲）。この「なま」は人間がはたらきかけない限り自然そのものであって、人間はそのまま利用できない自然という意味であろう。

宮原は、また子どもの住む地域の自然について“自然と子どもの人間的自然との直接的な結合ということと、住民の生活と労働の歴史を媒介として土に立つということとの二重の文脈がそこに一体化されている”ものと述べている（宮原、前掲）。これを教育の問題としてとらえれば、「自然教育」であり（岩田、1982）、生活教育であり、産業教育であり、技術・技能教育である。そしてその地域の自然を具体的に探せば、農村の自然またはそれを豊富に残存させている都市ということになる。

b. 都市環境のなかに「目こぼし」を

しかしそれだけでは、子どもの人間的自然に対応することはできない。そうした環境にはたらきかける子どもの主体としての質が問われる。道具の集積ではなく、はたらきかけによってはじめて道具化する自然は、主体の側にそうした自然にはたらきかけることで

きる質が備わっていることが必要である。

しかし、都市環境にはそうした自然も生活も、子どもにはない。前傾のように、都市は、フレイヴィンが指摘しているとおりにそれ自体によってさまざまな環境汚染を発生させている(フレイヴィン、前掲)。昨今の都市整備、都市計画は、そうした健康、生命にかかわる環境問題には、おそまきながら対処するようになり、さらには景観等への配慮も、意識化されてきた。しかしだからといって、道具の集積から脱してはいない。そして、人間がその起原にあたって身につけた人間的な自然、人間の^{ナチュラル}自然さに応える自然を提供する環境にはなっていない。それを可能にするのは、道具化されていない環境を用意するほかない。特定の目的にそって適したものではなく、子どものはたらきかけの如何によってはいかようにも改変され、多様な利用が可能になる「なまの自然」からなる環境の形成である。

このことについて示唆に富んだ提言が高橋金三郎の学習指導法「かわりだね・はしりもの」についての論述にみられる(高橋、1974)。「かわりだね・はしりもの」とは、小学校低学年における生物教育の実践方法である。子どもたちが地域のなかで変った生きもの、はじめてみる生きものを探して、毎日教室に実物を持ち寄り、朝の学級活動で報告し、話し

合う学習活動の指導法である。子どもたちはかわりだね・はしりものを探しに、地域を奔走する。そのことによって“肌で直接大自然につきあうことを教ええるものである”とも、“コントンの世界から「かわりだね・はしりもの」を選別し、選出し、抽出し、採集する、特殊な生物教育”と言っている(高橋、前掲)。また、特殊なものへの目は、必ず「人工化された緑」のなかの、人工化されそこなるところに向かうのではなからうか。刈られた芝生、手入れの行き届いた花壇のなかの手入れされてない「目こぼし」されたなかに「なまの自然」の姿を読み取ることができる。「かわりだね・はしりもの」はそうした成果が期待できる学習指導の目標と方法を表わしている。

高橋の提言で都市環境のありかたとして大事なものは、きちんと整備されていない、つまり道具化されていない「目こぼし」地帯を用意することである。つまり景観の上でも直接的な有用性の上においても拾い上げられないところこそ、じつは子どもの人間的な自然に見合う自然が潜在しているということである。そうだとすれば、都市環境のなかに道具化されてない「目こぼし」地域を豊富に用意することが、都市環境整備としてひつようなのである。

引用・参考文献

- 岩田好宏. 1982. 地域自然史教育論序説. 『生物科学』第34巻第3号. 岩波書店.
- 岩田好宏. 2008. 『「人間らしさ」の起原と歴史』. ベレ出版.
- 岩田好宏. 2009. ル・コルビュジエ散見. 『人間学研究所年誌2009』. 人間学研究所(印刷中).
- 小原秀雄. 2007. 『小原秀雄著作集4 人間(ヒト)学の展望』. 明石書店.
- 高橋金三郎. 1974. 低学年理科の起訴を考える. 『理科教室』第17巻第7号.
- 中野尊正・沼田眞・半谷高久・安部喜也. 1974. 『生態学講座 都市生態学』. 共立出版.
- C. フレイヴィン. 2007. はじめに. 『地球白書2007-2008』. ワールドウォッチジャパン.
- 宮原誠一. 1968. 地域—その自然の意味—. 『民研レポート』. 国民教育研究所.
- 村田実・平地勲. 2003. 『アパートメント』. 平凡社.
- ル・コルビュジエ, 吉阪隆正訳. 1967. 『建築をめざして』. 鹿島出版会.